

H.D. の *Trilogy* における女性的視座

喜多文子

はじめに

H.D. (Hilda Doolittle, 1886-1961) は、イマジズム詩人としてのみ紹介されることが一般に日本では多いようだが、彼女の詩人としての真価は、むしろ後期の長篇詩にこそあると言えよう。そこで本発表では、第二次世界大戦のただなかにロンドンで創作された H.D. の代表作の一つである *Trilogy* を取り上げ、彼女がこの長篇詩において、自分自身のみならず、世界大戦という危機に瀕した人類総体としての精神世界の在り方、そしてさらには、魂の救済を探究するという主題に対して、どのような取り組みを見せているのかを考察した。特に、H.D. 研究における 1980 年代以降のフェミニズム批評の成果を応用しつつ、アメリカ女性詩人としての視座が、H.D. の詩作品が持つ表現の独自性と拡がりいかに貢献しているのかを明らかにすることを主眼として論じた。また同時に、「大洋を越えるアメリカ女性詩人たち」という観点から、他のアメリカ女性詩人たちとの関わりについても概観した。

1. アメリカ時代

ペンシルヴェニア州のベツレヘムで生まれた H.D. が、Bryn Mawr College で Marianne Moore と同窓生であったことはよく知られている。この学生時代に、彼女は Ezra Pound と婚約しており、この二人の偉大なアメリカ詩人にとって、詩人としての感性を育んだ揺籃期ともいべきフィラデルフィア時代が重要であったことはたびたび指摘されることである。この時期の Pound との交流について書かれた H.D. の回想録 *End to Torment* (1979) の序文には、H.D. の娘、Perdita Schaffner の「彼らはともに若く、ともに若い詩人であり、革新者であり、親しい友であった」という言葉が引用されているが、William Carlos Williams も含めて後にモダニズムを代表する詩人となる同年代の彼女ら彼らは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての時期を、同じ土地で同じ時代の空気を吸って過ごし、その交友関係の中心には詩があったということであろう。

H.D. の母のヘレンは神秘主義的なキリスト新教徒、モラヴィア兄弟団の家系の出身、父のチャールズはペンシルヴェニア大学の天文学の教授で大学付属の天文台の所長を務めた。H.D. には、3 人の兄と 2 人の弟がいた。この家族とイングランド北部からやって来た先祖たちについて、フロイトとの精神分析を H.D. 自らが記録した *Tribute to Freud* (1959) の中に、「ニュー・イングランドの風雪に耐えその堅い岩石の中で性格をつくりあげた」という記述がある。H.D. は、1911 年にヨーロッパに渡り、生涯のほとんどをアメリカ東海岸から見て、いわゆる大西洋の対岸のヨーロッパで過ごしたが、このような彼女の言葉から、H.D. もまた Emily Dickinson と同じ精神風土の色合いをその背景に有するアメリカ詩人であると言うことは可能であろう。

2. イマジズムと H.D.

アメリカから渡ったロンドンにおいて、H.D. は、Pound が提唱し Amy Lowell が主導したイマジズム運動に参加する。Pound は、より急進的なヴォーティシズム論を展開してイマジズム運動から距離を置くが、H.D. は、1913 年に結婚したイギリス詩人 Richard Aldington とともに事実上イマジズム運動が収束する 1917 年までこれに深く関わり、代表的なイマジスト詩人として知られることになる。イマジズム運動に参加した詩人たちの作品の多くは、*The Egoist* に発表され、おもに Aldington と H.D. が編集に携わった。1916 年 8 月のこの詩誌において、H.D. は Moore の作品を称賛している。Susan Stanford Friedman ら批評家たちが、H.D. のモダニズム形成にとって、男性詩人たちのみならず女性詩人たちの存在が重要であったと指摘しているように、この記事がきっかけとなり、H.D. と Moore の間には、手紙を通して互いの作品を評価し支援する友情が生涯続いた。H.D. という詩人は、批評というものをほとんど残していない。したがって、Moore についての「彼女は自国において、卑劣さや商業主義と戦っている」という言葉には、詩人という存在についての H.D. 自身の信念、言いかえれば、戦争という動乱と苦悶の渦中であって、詩人としての言語への献身こそが自らのなすべきことであるという考えが反映されているように思う。

3. イマジズム以降

イマジズムが終息して以降、詩人として沈黙してしまったかのように思われがちな H.D. だが、1917 年に出版された最後のイマジズム詩集 *Some Imagist Poets* の後も、Pound によって見出されたイマジスト詩人ではなく、詩人として自ら語り始めることを模索していたことは、Diana Collecott が指摘しているように明らかであり、

想詩ともいふべき *Notes on Thought and Vision* が書かれた 1919 年が、H.D. の創作人生のターニングポイントにあたると言われている。第一次世界大戦の影が色濃く覆う H.D. の実人生に、生涯のパートナーとなって彼女の創作活動を支援し続けた Bryher (Annie Winifred Ellerman) が登場するからである。前述の *Tribute to Freud* は、自己の無意識の領域に沈殿したものを詩の言語として意識化するためにはフロイトの助けが必要だとして、H.D. が受けたフロイトとの精神分析の記録をもとに 1944 年に書かれたものだが、この年、H.D. は驚くべき創作意欲を見せ、*Trilogy* の第一部 *The Walls Do Not Fall* を出版し、第二部 *Tribute to the Angels* および第三部 *The Flowering of the Rod* を書き上げている。

4. 『戦争三部作』としての *Trilogy*

「トリロジー」とは元来「三部作」を意味し、古代ギリシアの三悲劇を指す。H.D. の三部作である *Trilogy* は、いずれもドイツ空軍によって大空襲に見舞われた戦時下のロンドンで書かれている。第一部 *The Walls Do Not Fall* のセクション 1、つまりこの作品全体の冒頭において、絶え間ない空爆により死が日常になっているロンドンの惨状と古代エジプトの古都テーベのナイル川東岸の神殿群のある聖地カルナクやポンペイ火山の噴火という歴史上の過去の大惨事が交錯しつつ重層化して描かれ、最終連における「だが、骨格は残った/ 不思議なことに、私たちは炎を通過した/ 何が私たちを救ったのか、何のために」という問いかけに対する答えを探ることによって、この H.D. ならではの叙事詩ともいえる長篇詩は展開してゆく。

Tony Trigilio は、西洋社会が経験する大きな変化—ここでは特に、20 世紀における二度の世界大戦—に対応するかたちで、詩における反伝統としての預言の言語という異端の伝統が時に顕在化するとしており、これによれば、H.D. が創造した詩の言語は、理性の作用がおよばない「つづり換え」(anagram) の言葉のように、正統のロゴスに支配された「理性の王国」を想起させながらも、同時にそれをダイナミックに変革するものと捉えることができる。したがって、そのテキストはモダニズムの時代ならではの独自の形状をみせているはずである。たとえば、第二部 *Tribute to the Angels* は、新約聖書の『ヨハネの黙示録』が作品全体の枠組みとなっているが、これは、「西洋人の精神と想像力を形づくるもの」としての聖書の枠組みを基本的には踏襲していることから、H.D. が詩人としてのアイデンティティーをこの枠組みの中にあるものと認識していると言えるであろう。しかし、女性である H.D. が描くヴィジョンは、当然のことながら伝統的なそれとは異なり、Friedman が gyno-vision 「女性的幻視」と呼ぶ女性の形態をまとう神性が数多く登場する。また、H.D. の天使、ユリエルには、宗教的権威を表象する「聖堂」や「神殿」に代えて、自然界における季節の循環がもたらす「再生」の概念が付与されている。

第三部 *The Flowering of the Rod* のタイトルにもなっている「花咲く杖」とは、旧約聖書の「アロンの杖が芽を吹き、つぼみをつけ、花を咲かせ、アーモンドの実を結んでいた」とされる「アロンの杖」だが、死から甦る再生の象徴であり、そこから転じて自然界における冬から春への転換によってロンドンの広場の花咲く木が描写される。この *The Flowering of the Rod* におもに登場するのは、キリストの復活および誕生に深く関わったマグダラのマリアと東方の三博士の一人、カスパールである。三部作の最後の場面に登場するマリアは、宗教的権威からは程遠く、その素朴さゆえにみずみずしい生命力を放つ。こうして、H.D. は、死を乗り越えた再生の物語が成就し、そしてそれはまた始まるということを示している。

主要参考文献

Collecott, Diana. *H.D. and Sapphic Modernism*. Cambridge UP, 1999.

Friedman, Susan Stanford. "H.D." *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*. Edited by Bonnie Kime Scott. Indiana UP, 1990.

---. *Penelope's Web: Gender, Modernity, H.D.'s Fiction*. Cambridge UP, 1990.

H.D. *End to Torment: A Memoir of Ezra Pound by H.D.* Edited by Norman Holmes Pearson and Michael King. Carcanet, 1980.

---. "Marian Moore." *The Egoist*, 3, no. 8, August 1916, pp. 118-19.

---. *Notes on Thought and Vision*. Edited by Albert Gelpi. London: Peter Owen, 1988.

---. *Tribute to Freud*. 1956: Carcanet, 1985.

---. *Trilogy*. Carcanet, 1973.

Hollenberg, Donna, ed. *Between History and Poetry: The Letters of H.D. and Norman Holmes Pearson*. U of Iowa P, 1997.

Trigilio, Tony. "Strange Prophecies Anew": *Rereading Apocalypse in Blake, H.D., and Ginsberg*. Cranbury: Associated UP, 2000.